女を盗む話と「東下り」考

－『伊勢物語』六段を中心に －

閔 丙 勳*

目　次

1. はじめに
2. 女を盗む話と東國
3.「竹芝伝説」の東下り
4.『伊勢物語』六段の構造
5. おわりに

1. はじめに

『伊勢物語』の中には主人公の男が京を發ち、地方へ流離する内容が大きく二ヵ所に見えており、各々「東下り」章段・「西國くだり」章段とよばれている。兩章段ともに紀行文の形をとっているが、その内容からすると、「西國くだり」章段は逍遙の旅であり、「東下り」章段は都落ちの旅であることがわかる。兩者の關連については、<『伊勢物語』「二條の后」章段と「東下り」章段の增益と変容>1)で考察したが、「東下り」章段の中には貴種流離譚の投影が見られると言われており、平安時代の代表的な物語のうちにも類型のものがいくつかある。たとえば、『竹取物語』は、かぐや姫が月の世界で罪を犯し、この世に流謫される話であり、『源氏物語』では光源氏の須磨流謫がそれに當たる。それらは結末として歸還が約束されているような構造をしめしているが、しかし、東國へ送られる場合は、歸れない追放や掠奪・逃亡の話型と結び付くことが多く、説話的な色彩が濃厚であるといえる。『大和物語』百五十五段がそうであり、『更級日記』「竹芝伝説」がそうである。また、逃亡が失敗に終わってはいるが、『伊勢物語』六段も人の娘を盗んで逃亡する内容で始まっており、目的地は記されていないが、「行く先おほく」と語られていることから、類型と見做すことができよう。

* 大田大學校 助教授 日本古典文學

1) 閔丙勳(2003)「日本文化學報」19輯、韓國日本文化學會、pp47～64

本稿では、『伊勢物語』六段で、女を掠奪して逃走する話型の深層を探り、同源と思われる周辺の作品を照らし合わせて考察したい。ことに、『更級日記』の「竹芝伝說」を浮彫りにして論を進めていきたい。歴史資料を通してもわかるように、奈良時代から平安時代にかけて「東下り」を髣髴させる記事を探すのは難しいことではない。

2. 女を盗む話と東國

『伊勢物語』六段は、歴史性と俗信性に富んだ内容を有し、それに相當するたくさんの問題を抱えている。ことに、後注(歌につづく地の文)に基づいた、在原業平と二條の后高子をめぐる權力爭いの實話を物語化したものという見解は、一般にはほぼ定着しているといって良い。が、後注がどこまで信頼でき、またそれが後に增益されたものである可能性が高いのも事實である以上、その可否については一概に言えないものがある。ただ、物語の内容から、女を掠奪したことが發覺し、それが男を都落ちさせる原因に作用したという見解に異論はない。

しかし、「戀愛-掠奪-追放または逃亡」につづく話の底辺には、ある男の一代記にはできない獨特な地方色が潛んでいると思われる。六段の素材には「東下り」章段の始まりともいえる東國關係要素が溶け込まれているということである。それは單に、掠奪失敗による東國への追放というようなものではなく、『万葉集』卷十四の「東歌」のように、東國關係章段の一段としての性格を十分に帶びていることを意味する。

『伊勢物語』六段を出典とする『今昔物語集』卷二十七「在原業平の中將の女鬼にくらはるる語」[2)]は、主人公に業平を當てていることから、『伊勢物語』が「在五が物語」として認識されていたことは疑う余地がない。ところが、『今昔物語集』には『伊勢物語』の「白玉か」の歌と後注の内容が脫落しており、業平が盜んだ女が二條の后であるとも書いていない。全体的構成においても「現存伊勢物語」が伝える内容とは相違がみられる。『今昔物語集』が『伊勢物語』を典據とする場合、後注を省き、内容を変える必要があったのか疑問である。他の『今昔物語集』卷二十四の三五話「在原業平中將行東方讀和歌語」[3)]では、實名を用いているものの、『伊勢物語』九段を忠實に採錄していることがわかる。この違いは『今昔物語集』の作者が手に入れていた「伊勢物語」には「現存伊勢物語」六段の後注がなかったことを暗示するものかもしれない。六段の主人公の名が業平である根據はどこにもなく、「原伊勢物語」には男が女を盜む話と、藏の中で女が鬼に喰われる話だけがあったと推されるのであ

2) 馬淵和夫ほか校注・譯(1976)『今昔物語集』4卷、小學館、pp.38～40
3) 馬淵和夫ほか校注・譯(1976)『今昔物語集』3卷、小學館、pp.374～377

る。ただ『今昔物語集』の作者は世間の噂に着目し、男を業平らしき人物に見立てて實話のように脚色した可能性はあり得る。したがって場面も「あくた河」から「北山科」に変え、現在的視点に設定しなければならなくなる。『今昔物語集』で業平が女を盗み出した理由と行爲は、『伊勢物語』地の文で男が女を盗んで暗闇を走る内容とは掛け離れており、その叙情性においても格差は顯著である。これ以上の追及は『伊勢物語』の成立時期の問題にかかるため避けるが、『今昔物語集』との比較によって『伊勢物語』六段が一次的に作られたものではなく、二、三次にわたって增益されていったことはある程度理解できよう。『今昔物語集』は、『伊勢物語』六段の象徵性豊かな物語の背景を具体的な事物に置き換え、伝承姓を消失させているとも言える。

『伊勢物語』六段の主な研究テーマとなっているのは、前述したように「二條の后」をめぐる政治問題や、「鬼一口」に纏わる鬼研究、そして口承文芸の掠奪婚の類型である女を盗む話の考証などである。しかしそれらは、三段・四段・五段につづく、業平と二條の后の戀愛譚を繫げるための表面研究であり、地の文に反映されている風土についての研究はほとんどなされていない。表面的には都を舞台にしているようにみえるが、投影されているのは强い地方色であり、次の東下り章段の始まりともいえるべくたくさんの要素を含んでいる。簡單に言えば、『伊勢物語』六段は二重構造を呈しているのである。

表面構造：三段-四段-五段-**六段**(二條の后關係章段)
裏面構造：　　**六段**-七段-八段(東下り關係章段)

前述したように、六段は掠奪婚の伝承文芸の系譜を引くものを含んでいるが、平安朝文學の中から類型を擧げると次のようなものがある。

『伊勢物語』十二段　— 武藏野　— 男
『大和物語』百五十四段 — 大和國、龍田山 — 京より來たりける男
『大和物語』百五十五段 — 陸奥國、安積郡 — 内舍人
『更級日記』「竹芝伝說」— 武藏國 — 火焚屋の火焚く衛士
『今昔物語集』卷二十七第七話 — 北山科の辺り — 在原業平の中將
『今昔物語集』卷三十第八話 — 陸奥國、安積郡 — 内舍人(『大和物語』百五十五段に同じ)

このうち、『伊勢物語』十二段、『大和物語』百五十五段、『今昔物語集』卷三十第八話、『更級日記』「竹芝伝說」等が東國と關係している。人の娘を盗んで逃亡する場所として東國が當てられているのである。しかし、結果として『伊勢物語』十二段、『大和物語』百五十五段は破局を迎えており、『更級日記』「竹芝伝說」は目出度しで終わっている。この違いは、

語り手の視点から考えると深層の意味を持っているといえる。前者は都人の視点であり、後者は武藏國の人の視点である。すなわち失敗譚は都で膾炙されたものらしく、成功譚は地方に口伝されていたものと考えられる。また、『伊勢物語』の作者は「盗む」という言葉を用いているが、『更級日記』の語り手の話の中には强引さがまったく見られず、女の側から積極的にそれを望んでいる。

> (前略)御簾をゝしあげて、「あのをのこ、こち寄れ」と召しければ、かしこまりて高欄のつらにまいりたりければ、「いひつること、いま一かへりわれにいひて聞かせよ」と仰せられければ、酒壺のことを、いま一かへり申しければ、「我ゐて行きて見せよ。さいふやうあり」と仰せられければ、かしこく恐ろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、おいたてまつりて下るに、(後略)[4]

「掠奪」という言葉で說明するにはやや不適當と思われるものがある。『大和物語』では、內舍人が女の同意を得ず、獨斷的に女を馬に乘せ晝夜で走って、行き着いた所が「陸奧國」である。以降も女は幸せになることはなく、悲慘な最期を迎えることになる[5]。男の出自が「內舍人」とあることからその地位を窺うことができる。『官職要解』によると、「職掌は、『大法令』に『帶刀宿衛、供奉雜使、若し駕行あらば前後に分衛することを掌る。』と見える。詰所は、中務省內の東北隅にあった。のちには、內舍人のなかより選拔されて、攝政・關白の隨身につけられたこともあって、これを內舍人隨身といったのである。(中略)四位以下五位以上の子孫の性識儀容を選び、そのなかから優秀なものを採って內舍人としたので、百余人に及んだこともある」[6]と記されている。奈良時代後期の歌人で、大伴旅人(天平三年大納言の時に沒)の嫡男として生まれた大伴家持も、天平十年頃、內舍人として聖武天皇の宮廷に仕えたことがあり、主として內舍人は、身分的に申し分のない公卿の子弟の中から選ばれていたことが以上の事實で確認できる。

物語の中で男に連れ去られる女は大納言の娘で、「帝に奉らむとてかしづきたまひける」と語っていることから、『伊勢物語』六段の後注を下敷にした可能性もあるが、卽斷はできない。それはともかく、『大和物語』での逃亡は絶望と不安と恐怖に繫がる東下りであった。

---

4) 西下経一校注(1977)『更級日記』「日本古典文學大系」岩波書店、pp.483
5) 阿部俊子・今井源衛校注(1968)『大和物語』「日本古典文學大系」岩波書店、pp.112～120
6) 和田英松(1995)『新訂官職要解』講談社學術文庫、pp.73～74

3.「竹芝伝説」の東下り

それに反して、武藏國が歸着点となっている『更級日記』の「竹芝伝説」では、皇女の武藏國にたいする憧憬が表に滲み出ており、希望に滿ちている。皇女を連れ去った男は武藏國から徵發された「衛士」であり、貴族でもなければ都人でもない。「衛士」とは、律令制の下で諸國軍団から毎年(後に三年)交替で上京し、衛門府、左右衛門府に配屬される兵士のことで、宮門の警備や行幸の供奉などにあたっていた者を言い、彼等は王權確立のために、坂東諸國の有力豪族の子弟の中から徵發された所謂人質のような人々であった7)。

それではなぜ、「竹芝伝説」で「帝の御むすめ」程のやんごとなき身分の人が、一介の衛士に伴われて武藏國まで行ったのか。男の呟いた武藏國の情景が榮華を捨てさせるほど女の心を動かしたのであろうか。この伝説的な話が史實を根據にしているか否かを探るのは甚だ難しいことである。だが、益田勝實氏は『說話文學と繪卷』の中で、それを「かがやかしい逃亡」と名付け、また、事實無根ではないらしいと述べている8)。益田氏は、『續日本紀』の記事、

> 壬申、武藏國足立郡人外從五位下丈部直不破麿等六人賜姓武藏宿禰。
> 甲申、外從五位下武藏宿禰不破麿爲武藏國々造。9)

などを根據にして、物語と史實の結び付きを図っている。突然史料に現れて「武藏宿禰」を賜姓した「不破麿等六人」と、國造に任ぜられた「武藏宿禰不破麿」の記事を因子にした論考である。

さらに益田氏は、太田亮氏の『姓氏家系大事典』での考察を指摘し、もう一つの論を提示している。太田亮氏は、

> 武藏國足立郡の采女掌侍典掃從四位の下武藏の宿禰家刀自卒す。10)

をもとに、「不破麿」が躍進を成し遂げたのは、娘の「采女の家刀自」の功によるものであると解しているのである。それが事實であるなら、「不破麿＝竹芝の男」說は否定されざるを得ない。これに對して益田氏は、當時の天皇は女帝の称德帝のため、采女が寵を被るのは考えられないと披瀝し、むしろ采女は「竹芝伝説」でいう姫君ではないかと論じているので

7) 笹山晴生(1980)「衛士」『國史大事典』2所收、吉川弘文館、p.262
8) 益田勝實(1980)『說話文學と繪卷』「かがやかしい逃亡」、三一書房、pp.23～32
9) 青木和夫ほか校注(1990)『續日本紀』四、卷二十八神護景雲元年十二月の記事、岩波書店、p.187
10) 太田亮(1955)『姓氏家系大事典』角川書店、p.1485

ある。

益田氏の主張する兩説は興味をひくものではあるが、「竹芝伝説」で「武藏の國を預けとらせて」の對象は「衛士」であり、「武藏といふ姓を得てなむ」の對象が「子ども」であることを見逃しているのだろうか。「衛士＝國造」は成り立つが、「衛士＝武藏宿禰」は成立しないのである。不破麿がはじめて武藏宿禰を賜ったとすれば、「不破麿＝衛士の子」という關係になるはずである。また、「采女＝姫君」説は、武藏宿禰の不破麿と時間的に二十年もの差ができるため、「不破麿＝衛士」の図式からいっそう遠ざかる説になってしまう。また、益田説の不當なもう一つの理由は、丈部直不破麿は神護景雲元年八月、外從五位下で下總員外介となっており、「不破麿＝衛士の子」の關係式も成立しなくなるということである。

武藏宿禰不破麿のことを史的な見地から考えると、彼のような史書への突然の出現が時代的狀況において必ずしも稀なこととは言いがたいところがある。當時の政府方針として東北経營(蝦夷政策)という重大な事があり、政策の一環として桃生柵の北方に建て始めた伊治城が完成している[11]。その工事にあたって坂東八ヵ國から勞働力を徵發、動員していたことは十分考えられる。豪族出身の指揮者が築造の功績を認められ、武藏宿禰の姓を賜わったり、昇進が著しかったりした例は頻繁であった。不破麿をそのうちの一人と考えても不思議ではない。

「竹芝伝説」の典據を史實から模索すると、むしろ「衛士」として上京した人が勞役に堪えられず、逃亡してくる出來事が伝説を派生したと見るか、あるいは、武藏國の出身で衛士に出された男が出世を極め、京の貴婦人を連れて武藏國の國司に任官された史實がもとになったと見るのが自然である。それが民衆の間で噂され、さらにその貴婦人が帝の娘に祭り上げられ、伝承するに至ったと理解するのがもっとも相応しいと思われる。

そこで前者の、逃亡する衛士のことを史料から調べると、元正天皇養老六年二月に、

> 諸府の衛士、往往に偶語して、逃亡すること禁め難し。然る所以は、壯年にして役に赴き、白首にして鄕に歸りぬ。艱苦弥深くして、遂に疏網に陷る。望ましくは三周して相替りて、壞土の心を慰めしめむことを。[12]

と、養老五年三月に、兵部卿從四位上阿倍朝臣首名等の奏上に応じて、役年を三年に減じている詔を出している。大宝軍令の「一年交替」と規定する內容とは矛盾しているが、それはともかく、衛士の待遇策の貧困に伴って、それに堪えられなくなった衛士が窮地から逃亡する事件が多發しているのである。益田氏は「かがやかしい逃亡」の末尾で次のようにまとめている。

---

11) 陸奥國栗原郡の地で、伊治呰麻呂の根據地。その反亂の發端となった地。『續日本紀』四、p.181
12) 青木和夫ほか校注(1990)『續日本紀』二、「新日本古典文學大系」岩波書店、pp.109～111

課役からの逃亡という形で、その逃亡という抵抗がかえってこよない成功・致富をもたらす、というふうに伝承していく底には、自分自身衛士となっていかねばならなかった人々、民衆の心理がそこに息づいている。かれらは逃亡をも美しく語り上げ、その中に苦しい生活からの解放を空想する。氏族勃興の伝承を語る地方豪族の子孫たちだけでなく、その話を引き取って、武藏の一角の地縁的共同社會の伝承に仕上げていく、みずから衛士になって都に向かわざるをえない人々の説話形成への參加のあとが、ここに歴然としている。伝承が血縁的な氏族の管掌から地縁的共同社會の手に移されるいとなみがそこにあって、美しい姫君の貴種流離譚は、民衆の現實的な生活上の問題―衛士役からの逃亡と結びついた。地域の伝承の中に、新しい伝承の担い手の階級性・現實的問題意識が反映されていった、とみられる。13)

「竹芝伝説」を、勞役から逃亡する衛士の事が武藏で美化され、伝承するに至ったことを物語るものとする見解だが、差し障りのないものと考える。

だが、方法としての現實感が欠けている。『更級日記』の作者の菅原孝標の娘が耳にした場所は現地であるから、伝承發生は武藏國内であり、現地人の間では衛士と姫君に當たる實際人物の對象がうわさされていたと推測される。「衛士逃亡」の事實だけで伝説が生成されたとするのは飛躍があると言わざるをえない。

そこで筆者は、武藏國の出身で衛士になって上京し、目覺ましい出世を成し遂げ、また武藏守に任官されたことのある人物を史書の中から拾ってみた。それに當てはまる人に高麗福信がいる。福信は武藏國高麗郡の出身で、京に上り、薨伝によると相撲の力を認められ、内豎所に召されて名をあらわし、右衛士の大志に初任している。その後の昇進ぶりは『續日本紀』に、

- 聖武天皇天平十年三月辛未(三日)、從六位上背奈公福信に外從五位下を授く。
- 同、十五年六月癸巳(二十六日)、正五位下背奈王福信を東宮亮。
- 同、十九年六月辛亥(七日)、正五位の下背奈の福信(中略)等八人に背奈の王の姓を賜ふ。
- 同、二十年二月己未(十九日)、背奈の王福信に正五位の上、云々
  ：
- 称德天皇宝龜元年八月丁巳(二十八日)從三位高麗の朝臣福信を兼武藏の守と爲し、云々
  ：
- 桓武天皇延暦二年六月丙寅(二十一日)彈正の尹從三位高倉の朝臣福信を兼武藏の守と爲し、云々14)

13) 益田勝實(1980)『説話文學と繪卷』「かがやかしい逃亡」、三一書房、pp.23～32
14) 青木和夫ほか校注(1990)『續日本紀』「日本古典文學大系」岩波書店、p.2-339・429・3-45・53・4-295

などの記錄が見え、武藏國の出でありながらも著しい昇進を成し遂げていることがわかる。

福信のように、鄕里を離れる頃は衛士だったはずの人が貴婦人とともに國守として赴任し、民衆はそれを目の當たりにして國守の妻を帝の姫君に作り上げ、それに逃亡衛士の像を重ね合わせたのかもしれない。それがやがて「竹芝伝說」として伝承されるようになったとすることもできる。もちろん、伝說の主人公が福信であるとは一概にいえないものがある。なぜならば『更級日記』で明示しているように、男の子息の姓は「武藏」とあるからである。武藏宿禰の一族の中で、衛士となって中央に上り、國造になるなど、出世を極めた人がいれば、伝說にもっとも適した人物となろう。

そこで、再び歷史資料から「竹芝伝說」の衛士にもっとも相応しい人物を追及していたら、前掲の武藏不破麿が浮かび上がった。森田悌氏の『古代東國と大和政權』[15]の中に、武藏宿禰不破麿についての詳細な史的言及があった。とくに注目に値するところは、不破麿が外從五位下に叙されたのは、藤原仲麿の亂鎭壓の過程で功績をあげたのが原因と作用しているという指摘である。武藏宿禰の賜姓もその後であり[16]、さらに二日後には武藏國造に任ぜられている。急速な昇進を成し遂げるのは事實であるが、不破麿の史料への初登場は、天平宝字八年(764)九月庚午條で、すでに正六位上に就いており、したがって、外從五位下への昇進は突然の出來事ではないことが確認できる。

「竹芝伝說」での男の移動は「武藏―京―武藏」であり、主人公の男に不破麿を當てる場合、何より問題になるのは、不破麿が京に滯在したことがあるかないかである。森田氏の紹介する、宝龜四年(773)太政官符によると、不破麿の官名は「左衛士員外佐」で、從五位に位置している。また、官名から推測できるように、彼が京官として活躍したことは事實である。ところが、上京の動機は何であり、時期はいつからなのかが問題として殘る。前述の、藤原仲麿の亂鎭壓の過程で功績を上げたことは、近畿が背景にあったことを表すものである。すなわち、不破麿も高麗福信のように、若い頃から京にいたことになる。しかも太政官符に記されているように、衛士を統率する地位に就いていたのも、右衛士の大志に初任する高麗福信の官界進出の形と似ている。卽斷はできないが、兩者とも最初は衛士として出發した可能性は高いと思われる。しかし、太田亮氏の指摘する、延曆六年(787)四月乙丑(十一日)條の、「武藏宿禰の家刀自采女掌侍典掃從四位下」があり、武藏宿禰の家刀自の采女の存在によって、不破麿の衛士としての上京は成り立たなくなる。なぜならば、武藏宿禰の家刀自の采女を不破麿の一族とすると、有力豪族の家系での義務として、衛士や采女の貢進は片方だけと定められていたからである。それによって、不破麿の衛士としての入京はあり得ないことになるのである。だが、家刀自の沒年は延曆六年(787)であり、不

15) 森田悌(1992)『古代東國と大和政權』所收「武藏國足立郡司と丈部直」新人物往來社、pp.232～242
16) 青木和夫ほか校注(1990)『續日本紀』四、卷二十八神護景雲元年(767)十二月の記事、岩波書店、p.187

破麿が上京する時期と采女を差し出した年間が確認されないため、二人の年齢を推定するのは難しい。同時期における兩者の官位を比較すると、不破麿は神護景雲三年(769)八月に、從五位上に叙されており、家刀自の昇叙記事は宝龜六年(770)十月條に、從五位下と見え、史料を通じてわかることは、不破麿の昇進は藤原仲麿の亂の鎮壓の功績によるもので、家刀自の采女の功德によるものとは言いがたい。

前述したが、不破麿の中央進出は福信のように、一族連れの上京であった可能性が高く、中央政界への登庸を夢見ていた本人の願望によるものと考えられる。福信が相撲の力を認められたのと同じく、彼も卓越した武芸を賣り物にして自發的に衛士に志願し、その才能を朝廷に認められたとみるのも可能である。さらに、『將門記』で名を掲げている人物「武藏竹芝」[17]が不破麿の子孫に生まれるなど、諸事實が時間の積み重ねとともに人口に膾炙し、最終的には一つの伝說に結合され、「竹芝伝說」という輝かしい民間伝承を産み出すに至ったのであろう。

4.『伊勢物語』六段の構造

『伊勢物語』六段の逃亡は成功はしないが、地の文に「あくたがはといふ河を率て行きければ」、「行き先多く」、「男、弓、やなぐひを負ひて戸口にをり」などの描寫は、「竹芝伝說」で衛士が姫君を背負って力强く野山を走る姿と重なり合う。『伊勢物語』は、作者が伝承の上に現在的事象を重ね合わせたことによって、本來の說話的な要素の影が薄くなっていると考えられる。しかし、話型は「竹芝伝說」に通じるものがあり、根源をともにする話として理解することができよう。やはり伝承の淵源は「東國への好奇心」であり、「東國に對する憧れ」をへて、最終的には「東國への逃亡」へと發展していくのであろう。反面、東北の陸奥は中央の人にとってまだ暗黑の地であり、野蛮の地として認識されていたのではないだろうか。そのため、『大和物語』での陸奥への逃亡は悲惨な結末を見せているのであろう。

一方、東國は政治の中心勢力から排除された集団の配流の場所や逃げ場としてのイメージをも有していた。物語はまったくの事實無根の虛構ではなく、また興味本位のためだけで制作されるものだとは思えない。重大な歷史の斷面を物語り、事實を殘そうとする作者の意図が作中に秘められているのである。かつての壬申の亂で「大海人の皇子(後の天武天皇)」に追われ、山前に隱れて首を吊って死んだと伝えられる「大友の皇子」も、一說では東國に逃れたという見方をしている。[18]その他にも、和邇氏の東國への移動など、古代史を

17) 林陸郎(1975)『史實將門記』新人物往來社、pp.124～130

彩る重大事件が文學の中にあらゆる形で溶け込まれている。『古事記』では倭建命の東征譚の中に、『伊勢物語』では東下り譚の中に投影されているのである。

それらの素材を下敷にしながら現在的事物と都合良く組み合わせようとしているから、『伊勢物語』六段のように、和歌の前後の地の文の間に矛盾が生じるのである。歌の前の地の文を問題にすると、無理に導入されたとしかみえない表現がある。それは、「白玉か」の歌を導き出すために置かれた「草の上に置きたりける露を、『かれはなにぞ』となむ男に問ひける」の文である。まさに、歌と地の文との間に有機的な關連を持たせて作り上げた「歌物語」の特徴を如實に表したものである。そのため、緊迫に展開していたドラマが突然動きを止めたような、異質的な雰囲氣を釀し出しているのであろう。

高木市之助は六段の歌物語性について、

> 本段の如きは地の文が比較的長く、歌としては右の歌が一首あるだけであり、話の筋も勿論一章の說話を構成するに足りるだけの內容を備えている。つまり伊勢物語中で歌の演ずる役割の比較的輕い一段なのであるが、しかしよく觀ると、本段の興味の中心をなすものはやはりこの唯一首の歌にある事を否定し得ないのである。もしこの段から歌を除くとすれば、はじめて出て來る「草のうへにをきたりけりつゆを、かれはなにぞとなん、おとこにとひける」の一句も無意味となり、歌の直前の「やうやう夜もあけゆくに、みればゐてこし女もなし。あしずりをしてなけどもかひなし」といふ力强い一句も語勢の歸着を失ってしまふ。これは一例であるが、歌がもっと重要な役割を受持つ他の諸段に於て、もしそれらの歌を除くば、殘りの文はどんなにつまらぬ拔殼となってしまふであらう。しかしここに注意を要する事は、興味の核心を成すものであるからといって、他の散文の部分が歌の興味に與らないで素知らぬ顔をしてゐるのでは決してないといふ事である。ここに歌の小序から歌物語への一の飛躍があるのであって、歌物語に於ては既に文の一部分であり、同時に文も亦歌を含んで、說話し、叙述する半面に於て、憂ひ、たのしみ、嘆き、訴へ等々、和歌的抒情的興味を表現するのである。[19]

と述べているが、歌を挿入するために「草の上に置きたりける露を、『かれはなにぞ』となむ男に問ひける」の文を、別の內容の文章に接續したとすると、「白玉か」の歌と、相互補完關係にあるのは當たり前のことである。つまり、歌物語の創作に因んで組み合わされたものにほかならないということである。ただ、歌物語だからといって全章段ともに歌が中心であるという主張は多かれ少なかれ無理がある。歌物語の形式上、歌が占める役割の重要さはいうまでもないことである。しかしそれはあくまでも構成に關わるものであり、すべての章段において內容の中心をなしているとは限らない。六段をみてもわかるように、

---

18) 豊田有恒(1990)『大友の東下り』講談社、計p.274
19) 高木市之助「物語の歴史」『日本文學講座』4巻所收、改造社、p.18‐19

「白玉か」の歌は、男が女を掠奪して逃亡する内容や、また女が鬼に喰われる内容とはまったくといっていいくらい關係性が乏しい。もちろん、すべての章段に同じことがいえるというわけではない。たとえば、次の七段においては、地の文と歌とが何ら問題なく自然に繋がっている。八段も同様、いかにも地の文の内容に合う歌が詠まれているのである。歌物語の制作において、歌の役割はいくら言ってもすぎないものがあるが、全章段ともに、歌に合わせて地の文が結び付けられたとは思えない。もしそうであるなら、東國關係章段の中に詠まれている歌がすべて東國と關連するものでなければならない。しかし必ずしもそうとは限らず、別に東國ではなく、西國關係章段の中に讀み込まれていても支障のないものがある。七段の「いとどしく過ぎゆく方の戀しきにうらやましくもかへる浪かな」の歌、または、九段の「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」等は、旅を歌うものではあるが、地域性はそれほど反映されていない。

『伊勢物語』の初冠本の百二十五段本の章段配列において、作者もしくは編者が「初冠―失戀―東下り」のような構成を意図していたことは想像に難くない。またその順序に合わせて物語を展開していく場合、ひとまず考えられるのは、点としての歌ではなく、線としての話型であろう。歌だけを持って物語を構築するのは不可能であり、物語を説明するのも甚だ難しいことである。物語を制作する時、何より粗筋を立てることが先であり、それに辻褄を合わせて關わりのある歌を導入するのが順序であろう。形式的に歌と地の文は有機的に融合され、歌物語を完成させる對等關係にあるが、物語の内容においては、地の文に重心が置かれているとみるのが妥當であろう。

話型を構築するために、まず粗筋に合った素材が必要となる。たとえば、東下り章段の素材としては地方色豊かなものが相応しい。その中には伝承性に富んだ話があり、それに關連する歌がある。しかし、ある一方が欠けていたらそれを新しく作るか、どこかで持ってこなければならない。つまり伝承する話があって、それに因む歌がなければ、話に合わせて歌を作るか、他から持ってくるしかないということである。逆に、歌に合わせて散文を結び付けることもあろう。六段は、物語の流れに准じて推察すると、おそらく地の文が先に成立し、それに「歌物語」形式の特徴である歌を合わせた段であると思われる。「白玉か」の歌を説明するためにそこまで長い地の文を添える必要があっただろうか。物語の流れとして、夜這いが許されなくて、ついに女を盗む行爲に出た男の話が五段に續いて掲載されているのは十分理解できる。しかし、表現の素材となるものがまったく異質なものであるため、物語の見方が急に変わるのである。戀愛失敗の事を語るのに、鬼に女が喰われる話を結びつける理由はどこにもないのである。歌につづく地の文(後注)では、鬼を二條の后の兄弟である「堀河の大臣、太郎國経の大納言」と種明かししているが、「これは二條の后」で始まる書き方でわかるように、古文に解説を加えた補注にすぎないような感じがある。一段から五段までは、歌と歌を挾んでいる地の文の間に異質感はなく、まさしく在

原業平を思わせる内容がつづいている。それが六段に入ると、現實感は伝説的な雰囲氣に色変えて、讀み手に今までとは違った虚構感を覺えさせる。もちろん、後注とされる地の文では現實的な素材を加えて五段に連續する話として結論づけようとしているが、語り方があまりにも現實的で、それをもって歌の前の地の文を説明するには無理が感じられる。

5. おわりに

前述したように、作者の作意の中に掠奪の失敗が用意されていたことは十分推測できる。しかし女を盗み出してから鬼に喰われるまでの狀況が、初段の「かくいちはやきみやびをなむしける」男には程遠い内容を有する。主人公を業平らしき人物に見做して物語を讀む場合、「行く先多く」、「鬼ある所ともしらで」、「男、弓、やなぐいを負ひて戸口にをり」などの文は、前段までの業平らしき人物を特徴づけるものとは甚だ相違が見受けられる。むしろ、『今昔物語集』の「在原業平の中將の女鬼にくらはる語」の方が背景としては相応しいと言えよう。

いずれにしろ、作者もしくは編者は、六段で都人の男を極限の境遇に立たせ、結局女を鬼に失う形をとって二條の后章段に終止符を打っている。事實上、男と女の別れをもって物語を一段落づけようとしたならば、四段のように女が入内する内容で十分決着はつくのである。それにもかかわらず、六段を通じて再び「女の死」を用いて男女關係を裂くのは、六段の冒頭で「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて」と記しているように、現實に果たせなかった女との結婚を强いて掠奪という形を用いてでも成就させようとしているからであろう。結局掠奪は失敗に終わり、破局を迎えることになる。またそれが原因となって七段から東下りに出るという解釋が成り立つのである。

ところが、本論で述べたように、女を盗んで逃亡すること自体、既に東下りを象徴するものがあり、平安朝の文學作品において、掠奪につづく逃亡の行き先に東國が占める割合が高いのは偶然の一致ではない。『伊勢物語』六段には、地名の言及はないが、「行く先多く」やつづく七段でわかるように、東への旅はあらかじめ意図されていたものであり、『更級日記』の「竹芝伝説」のような伝承を採用して、女を伴う逃亡の形をとっているのである。ただ、逃亡が成功すると、色好みの雅び男を主人公とする物語はそれ以上の生き延びは困難となる。そのため、もう一つの伝説的な存在の鬼を登場させ、女を男から切り離し男を獨り身にさせたのである。しかしこの話型はあまりにも現實感を欠くため、後注の地の文に事實らしい説明を補注したのであろう。

【參考文獻】

· 青木和夫ほか校注(1990)『續日本紀』2 · 3 · 4巻、岩波書店、p.2-339 · 429 · 3-45 · 53 · 4-295
· 阿部俊子 · 今井源衛校注(1968)『大和物語』岩波書店、pp.112～120
· 阿部秋夫ほか校注(1972)『源氏物語』(2)、小學館、pp.153～265
· 太田亮(1955)『姓氏家系大事典』角川書店、p.1485
· 大津有一 · 築島裕校注(1968)『伊勢物語』岩波書店、pp.326～327
· 門脇禎二(1965)『采女』「采女の出世」中公親書73、中央公論社、pp.116～124
· 阪倉篤義校注(1968)『竹取物語』岩波書店、pp.58～67
· 高木市之助「物語の歴史」『日本文學講座』4巻所收、改造社、p.18 · 19
· 西下経一校注(1977)『更級日記』岩波書店、pp.482～484
· 荻原淺男ほか校注 · 譯(1994)『古事記』小學館、pp.217～231
· 林陸郎(1975)『史實將門記』新人物往來社、pp.124～130
· 益田勝實(1980)『說話文學と繪卷』「かがやかしい逃亡」、三一書房、pp.23～32
· 馬淵和夫ほか校注 · 譯(1976)『今昔物語集』3 · 4巻、小學館、pp.3-374～377 · 4-38～40
· 南波浩(1979)『物語文學』三 · 一書房、pp.171～187
· 閔丙勳(2000) <『伊勢物語』六段の「あくたがはといふ河」考>『國語と國文學』916号、東京大學國語國文學會、pp.17～30
· _____(2003) <『伊勢物語』「二條の后」章段と「東下り」章段の增益と変容>『日本文化學報』19集、韓國日本文化學會、pp.47～64
· 森田悌(1992)『古代東國と大和政權』所收「武藏國足立郡司と丈部直」、新人物往來社、pp.232～242
· 和田英松(1995)『新訂官職要解』講談社學術文庫、p.35 · pp.73～74

要 旨

『伊勢物語』六段は伝承譚を下敷にしながら、それを現在的事物と巧みに結合させようとしているところで、和歌の前の地の文と後注の間に矛盾が生じる。「草の上に置きたりける露を、『かれはなにぞ』となむ男に問ひける」の文は、「白玉か」の歌を導き出すために無理に導入された表現で、まさに歌と地の文との間に有機的な關連を持たせて作られる歌物語の特徴を如實に表したものである。また、「白玉か」の歌を說明するためにそこまで長い地の文を添える必要はないと思う。物語の流れとして、夜這いが許されず、ついに女を盜む行爲に出た男の話が五段に續いて語られているのは十分理解できるが、表現の素材となるものがまったく異質のため、物語の見方が急に変わるのである。戀愛失敗の事を語るのに、鬼に女が喰われる話と結びつける理由はどこにもない。歌に續く地の文(後注)では、鬼を二條の后の兄弟である「堀河の大臣、太郎國経の大納言」と種明かししているが、それも「これは二條の后」で始まる書き方でわかるように、古文に解說を加えた補注にすぎないものと推される。

『伊勢物語』六段での逃亡は成功には結び付かないが、地の文の「あくたがはといふ河を率て行きければ」「行く先多く」「男、弓、やなぐひを負ひて戸口にをり」などの表現は、『更級日記』の「竹芝伝說」で衛士が姫君を背負って力强く野山を走る場面と重なり合う。話型は「竹芝伝說」に通じるものがあり、淵源をともにする話として理解できるのである。しかし表面構成において、古き素材の上に現在的事象を重ね合わせることによって、本來の說話的な影像は色褪せているのであろう。

キーワード：伊勢物語六段、竹芝伝說、東下り、東國、逃亡譚、物語の深層

투　　고	: 2005. 2. 28
1차 심사	: 2005. 3. 12
2차 심사	: 2005. 4. 2

住　所：(300-716) 대전광역시 동구 용운동 96-3 대전대학교 일어일문학과
電　話：042-280-2259/016-638-8841
e-mail：mbh0301@dju.ac.kr